

ポーラ美術館 企画展



A Century of Portraiture
Renoir, Modigliani, Picasso and other artists from the collection

肖像 の 100 年

ルノワール

モディリアーニ

ピカソ

2009 年 3 月 14 日 (土) ~ 9 月 6 日 (日)

この件に関するお問合せ

株式会社ポーラ・オルビスホールディングス グループ広報室

TEL 03-3494-7123 FAX 03-3494-7640

ポーラ美術館 広報事務局

TEL 03-3575-9823 FAX 03-3574-0316

財団法人ポーラ美術振興財団 ポーラ美術館（神奈川県足柄下郡箱根町）では、2009年3月14日（土）から9月6日（日）まで、企画展『肖像の100年 ― ルノワール、モディリアーニ、ピカソ』を開催します。

「肖像」は、古代より絵画や彫刻で表現されてきた伝統ある主題です。時の権力者たちは、力を誇示するために自らの肖像を記念碑的な彫刻やコインのデザインで示しました。また墓碑彫刻では、亡くなった人の面影を忘れないために、生前の姿が表現されました。その後、長い間、王族や貴族など特権階級の人々の肖像が数多く制作されました。

フランスでは、革命後の19世紀になって、社会を支配していた王族や貴族が没落し、市民階級が台頭してきました。新しい社会の担い手となった市民たちは、自分の肖像画を欲しました。それらの肖像画は、あいかわらず、モデルの人物のステータスを表現するものでしたが、画家たちにとって肖像画を描くことは、同時代性を表すものとなっていきました。ピエール・オーギュスト・ルノワールら印象派の画家たちは、同時代に生きる人々を親密な雰囲気とともに描き出しています。また、人間の姿をありのままに写し出す肖像写真の登場は、人間の内面の表現や多様な人物表現へと肖像を向かわせました。

アメデオ・モディリアーニなどエコール・ド・パリの画家たちは、親しい人々の肖像画を描く際、モデルの容貌など外見的特徴をとらえるばかりでなく、モデルと向き合い、親しい立場にあるからこそわかるモデルの個性を描こうとしました。さらに20世紀を代表する画家、パブロ・ピカソは、肖像を自己の創作の造形的な実験のモチーフとして捉え、多様な作品を残しています。

本展覧会では、ポーラ美術館の西洋絵画コレクションから、19世紀から20世紀に制作された肖像を選び、ルノワール、モディリアーニ、ピカソをはじめとする画家たちが人間とどのように向き合い、その姿を描いてきたのかを探ります。また19世紀に発達した写真や印象派と同時代に活躍したアカデミズムの画家たちの肖像画との関係性や、肖像画に描かれた時代を映すファッションの変遷などもご紹介します。

表紙作品：広報用作品①
アメデオ・モディリアーニ
《婦人像（C.D.夫人）》
1916年頃
油彩/板、79.5×48.5cm
ポーラ美術館蔵

企画展『肖像の100年 — ルノワール、モディリアーニ、ピカソ』 開催概要

- 展覧会名 : 『肖像の100年 — ルノワール、モディリアーニ、ピカソ』
A Century of Portraiture: Renoir, Modigliani, Picasso and other artists from the collection
- 作品点数 : ポーラ美術館収蔵作品 50 点
国内美術館所蔵作品 27 点

※会期中、展示替がございます。詳細はお問い合わせください。
- 主催 : 財団法人ポーラ美術振興財団 ポーラ美術館
- 会期 : 2009年3月14日(土) — 9月6日(日)
- 会場 : ポーラ美術館 展示室1
〒250-0631 神奈川県足柄下郡箱根町仙石原小塚山 1285
Tel. 0460-84-2111 / Fax 0460-84-3108
ホームページ <http://www.polamuseum.or.jp>
- 開館時間 : 午前9時～午後5時 (入館は午後4時30分まで)
- 休館日 : 会期中無休
- 入館料 :

	個人	団体 (15名以上)
大人	1,800 円	1,500 円
シニア割引 (65歳以上)	1,600 円	1,500 円
大学・高校生	1,300 円	1,100 円
中学・小学生	700 円	500 円

※料金はいずれも消費税込み。
 ※中学生・小学生の入場については、土曜日は無料です。
 ※中・小学生が授業の一環として観覧する場合、中・小学生及び引率教員等の入場は無料です。

【担当学芸員によるギャラリートーク】 展覧会のみどころを美術館講堂及び展示室でご紹介します。

- 第1回 : 2009年4月4日(土) 第2回 : 5月16日(土)
 - 第3回 : 6月13日(土) 第4回 : 7月9日(木) 第5回 : 8月20日(木)
- 14:00～15:00 / 先着 30名様まで。美術館の講堂にお集まりください。
 参加費は無料 (ただし当日の入館券が必要です。)

1. ルノワールと19世紀の肖像

印象派と肖像画 — 日常生活の情景

ヨーロッパの肖像画は、王族や貴族など、特権階級の人々が画家に注文して制作されたものがほとんどです。それらを見ると、描かれた人物が誰なのかがはっきりしていることや、モデルの視線が鑑賞者のほうを向いていることが特徴として挙げられます。それらは、モデルとなった人物の権力や地位を誇示するようなポーズや服装で描かれています。顔立ちが美化されて描かれることもしばしば起こりました。19世紀に入ると市民階級が台頭しましたが、彼らの間でも肖像画は大流行しました。新しい社会の担い手たちは自分の肖像を欲し、多くの人々が肖像画制作を注文しています。

印象派のドガやモネ、セザンヌなどの画家たちは、家族や親しい友人などの肖像を描いています。それらは、19世紀以前の肖像画とは異なり、当時の市民の日常生活の情景や家族の団欒など同時代性を織り交ぜたものでした。特に、印象派の巨匠として知られるルノワールは、肖像画を数多く制作した画家です。彼の美しい女性の肖像は、当時の日常生活やファッションの記録ともなっています。このセクションでは、印象派の肖像を中心とする19世紀の肖像画をご紹介します。

■ おもな出品作品

エドゥアール・マネ 《ベンチにて》 1879年、パステル/カンヴァス、ポーラ美術館蔵

ピエール・オーギュスト・ルノワール 《レースの帽子の少女》 1891年、油彩/カンヴァス、ポーラ美術館蔵

ピエール・オーギュスト・ルノワール 《髪かざり》 1888年、油彩/カンヴァス、ポーラ美術館蔵



広報用作品②

エドゥアール・マネ 《ベンチにて》

1879年、パステル/カンヴァス、61.0×49.9cm

ポーラ美術館蔵



広報用作品③

ピエール・オーギュスト・ルノワール

《レースの帽子の少女》

1891年、油彩/カンヴァス、55.1×46.0cm

ポーラ美術館蔵

【特集展示 1 肖像画と写真】

19 世紀後半、印象派と同時代に活躍したアカデミズムの画家たちは、肖像画を数多く描いています。ウィリアム・アドルフ・ブグローの肖像画は、注文による肖像画の特徴をはっきり示しています。また、19 世紀に発達した写真技術によるナダールの肖像写真は、瞬間に広まり、人々が容易に自分の肖像を所有することを可能にしました。そして、ありのままの姿を写しとることを可能にした肖像写真は、肖像画を多様な表現へと向かわせました。



ウィリアム・アドルフ・ブグロー 《レディ マクスウェル》
1890 年、油彩/カンヴァス、129.2×89.2cm
村内美術館蔵 ※展示替あり



エドガー・ドガ 《ルアール夫妻の肖像》
1904 年頃、パステル/紙、86.7×107.8cm(画寸)
ポーラ美術館蔵

ブグローの《レディ マクスウェル》(村内美術館蔵)と、ドガの《ルアール夫妻の肖像》(ポーラ美術館蔵)を見比べてください。ブグローの作品は、モデルの目線が鑑賞者に向いているのに対し、ドガの作品では、鑑賞者のほうを向かず語り合っているような様子の夫妻の姿が描かれています。

II. モディリアーニとエコール・ド・パリの肖像

エコール・ド・パリ — 身体と人間性

1910～20 年代、パリのモンマルトル、モンパルナスには、多くの外国人が住み、制作に励んでいました。この界限には、「バトー・ラヴォワール」(洗濯船)や「ラ・リュッシュ」(蜂の巣)のような集合アトリエがあり、芸術家や文学者たちが交友し、カフェなどで芸術論を交わしていました。

モディリアーニやパスキンなどエコール・ド・パリの画家たちは、当時、金銭的にも苦勞を重ねていたことから職業モデルを雇うことができず、互いがモデルとなり、作品を描きました。彼らが描く肖像画には、モデルの外見的な容貌やポーズや服装以外に、表情などにみられる性格や感情が描写され、モデルの内面を表わす肖像画といえます。

■ おもな出品作品

- アメデオ・モディリアーニ 《婦人像 (C.D.夫人)》 1916 年頃、油彩/板、ポーラ美術館蔵
- ジュール・パスキン 《ルネとマルセル・ソヴァージュ》 1925 年、油彩/カンヴァス、ポーラ美術館蔵
- レオナルド・フジタ (藤田嗣治) 《自画像》 1929 年、水彩、墨/絹本、ポーラ美術館蔵

【特集展示2 女性の肖像とファッション】

19世紀末から20世紀前半のベル・エポックの時代、女性たちは次第に社会進出をはじめました。男性と同様、女性たちも外出する機会が増え、活動的になっていきました。これに伴い、女性たちのファッションも大きく変わりました。ウエストにコルセットを装着し、細く見せていたファッションから開放され、動きやすくモダンな衣服が流行の先端になっていきます。華やかなファッションに身をつつんだ女性たちの肖像からは、時代の動き、社会の変化をうかがうことができます。

※著作権の関係で
ホームページ上に
図版を掲載できま
せん。

キース・ヴァン・ドンゲン 《灰色の服の女》
1911年、油彩/カンヴァス、130.2 x 96.5 cm、ポーラ美術館蔵



※参考図版
『シック・パリジャン』より
1900-1910年頃
ポーラ文化研究所蔵

※著作権の関係で
ホームページ上に
図版を掲載できま
せん。

キスリング 《ファルコネッティ嬢》
1927年、油彩/カンヴァス、129.9 x 89.3cm、ポーラ美術館蔵



※参考図版
『ギルランド・デ・モワ』より
1920年
ポーラ文化研究所蔵

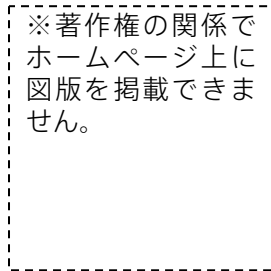
上のヴァン・ドンゲンとキスリングの作品を見比べてください。ヴァン・ドンゲンの作品では、大きな帽子をかぶり、コルセットでウエストを細く締めている女性が描かれています。しかし、キスリングが《ファルコネッティ嬢》を描いた頃は、アール・デコの時代を迎え、女性たちのファッションからコルセットは消え、足や肌の露出が多くなります。このようなスタイルは、同時代の雑誌などに掲載されていた挿絵にも見られます。

Ⅲ. ピカソの肖像

ピカソ — 変貌する身体

ピカソは伝統的な絵画の描き方を覆した 20 世紀最大の巨匠です。とりわけ彼は、人体をテーマに多くの作品を制作し、自分の絵画様式を展開させていきました。

ポーラ美術館は、青の時代、キュビズムの時代、新古典主義の時代の人物画、肖像画を多数収蔵しています。それらのなかには、妻や息子、恋人、友人など、ピカソと親しい関係にあった人物の肖像が含まれています。このセクションでは、これらの作品を展示し、ピカソの人物画の変遷をたどります。



パブロ・ピカソ 《花束を持つピエロに扮したパウロ》
1929 年、油彩/カンヴァス、130.4×97.3cm
ポーラ美術館蔵

■ おもな出品作品

- パブロ・ピカソ 《海辺の母子像》 1902 年、油彩/カンヴァス、ポーラ美術館蔵
- パブロ・ピカソ 《裸婦》 1909 年、油彩/カンヴァス、ポーラ美術館蔵
- パブロ・ピカソ 《葡萄の帽子の女》 1913 年、油彩/カンヴァス、ポーラ美術館蔵
- パブロ・ピカソ 《母子像》 1921 年、油彩/カンヴァス、ポーラ美術館蔵
- パブロ・ピカソ 《花売り》 1937 年、油彩/カンヴァス、ポーラ美術館蔵

【次回企画展】 『ボナールの庭、マティスの室内』

2009 年 9 月 12 日 (土) — 2010 年 3 月 7 日 (日) 会期中無休

【常設展示】 2009年3月11日（水）～2009年9月6日（日）

※会期中、一部作品の展示替がございます。詳細についてはお問い合わせください。

＜絵画＞ ポーラ美術館の絵画

ポーラ美術館は、モネやシスレーら印象派の絵画からピカソやブラックによる20世紀絵画までの西洋絵画をはじめ、日本の画家による洋画、日本画も数多く収蔵しています。常設展示「ポーラ美術館の絵画」では、当館のコレクションから約60点の絵画作品を選んで展示し、西洋と日本、それぞれの絵画の近代における様相を探ります。

＜小企画＞ 歿後40年 坂本繁二郎 — 白日夢の画人

九州・八女の地で静かに制作を続けた洋画家、坂本繁二郎（1882-1969）は、馬の美しい毛並みを淡くやさしい色彩で描き、愛らしい表情をとらえた「馬の画家」として知られています。同時に「哲人画家」とも呼ばれた坂本は、思索を重ねながら、能面や身の回りの静物をモチーフに、ゆるやかにその画境に到りました。小企画展では、当館収蔵作品の13点全てを展示し、坂本の画業を振り返ります。

＜東洋陶磁＞ フランスのみた東洋陶磁

19世紀末から20世紀初頭にかけて、フランスでは東洋の文物に対する関心が高まりをみせていました。本展示では、版画家として名高いアンリ・リヴィエール(1864-1951)のまとめた東洋陶磁目録に基づき、当館の収蔵作品によって、当時のフランスが東洋に向けたまなざしをたどります。

＜化粧道具＞ アール・ヌーヴォーの銀製手鏡とガラス工芸

化粧の小道具として欠くことのできない手鏡。ネオ・ロココやアール・ヌーヴォーなど19世紀末から20世紀に流行した、装飾文様が施された銀製手鏡を、同時代のエミール・ガレやドーム兄弟のガラス工芸とともにご紹介します。